



資産運用こぼれ話 和風資産運用のススメ

寄稿：岡本 和久

資産運用といとなぜかリスク、リターン、ポートフォリオなど英語がたくさん出てきます。何となく西洋の考え方が資産運用の基礎をなしているようなイメージがありますが、私は和風の感性が人生を通じての資産運用には非常に有益であると考えています。



<分散投資>

「和」という言葉には「加える」という意味と「調和」という二つの意味があります。つまり、「和」は多種多様なものを受け入れながら全体の調和を保つという意味が込められているのです。いろいろな地域から流れ着いて日本に住み始めた人々がみんな一緒になって一つの国を作った。まさに「和を以て尊しとなす」です。この考えは十分に分散されたポートフォリオに当てはまります。異なったビジネス、異なった株価の動きをする銘柄に最大限分散をするという資産運用の一番重要な考えに通じるものがあるのです。

<長期投資>

井原西鶴に「日本永代蔵」という本があります。彼が生きた江戸中期のビジネスの世界が生き生きと描かれています。「永代」というのは「時間的な制約がない」こと、「蔵」は財産を入れて置く場所です。つまり、永代蔵は長期的な資産を増やしたり失ったりする話がかかれています。現代的には「永代蔵」は人生を通じての長期資産形成です。一貫して流れる思想は少しずつ時間をかけて儲けるという考え方です。

<ESG>

長期に成功するにはその企業が世の中の役に立っていなければなりません。有名な近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という三方よしの思想はそれを言っています。この「世間よし」は、今投資の世界で注目されている ESG(環境・社会・企業統治)なのです。つまり、社会の役に立つ三方よしの企業を長期間保有し、少しずつ時間をかけて大きく儲けるのがアクティブ運用の成功の秘訣です。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

<パッシブ投資>

「知足」という言葉があります。京都の、龍安寺の庭の手水鉢に「吾唯知足(われただ足るを知る)」と書かれているのをご存知の方も多いでしょう。投資でも知足の考えは大切です。決して欲張って儲けようとしなさい。世界の経済はゆっくりと成長し、それに合わせて民間企業の価値もゆっくりと増えています。それ以上の投資収益を求めようというのは知足の思想に反します。江戸時代の商家が大切にされた思想に「分限」があります。分限とは「身のほど」の意味で、さらに分限を守る人が成功することから金持ちを意味するようにもなっています。世界の民間企業が生み出す付加価値は投資家に配分されます。個々人が出資している「分」を限度としてそれを受け取る。それで満足するのが知足です。知足と分限、ともに資産運用に有益な考え方です。

<コスト>

日本で大切にされている考え方に「もったいない」があります。世の中の富はみんなのもので、それをムダにしてはいけません。資源・環境問題が深刻な今日、大切な思想です。ケニア出身の環境保護活動家、ワンガリ・マータイさんが「Mottainai」として広め、世界的に注目されている考え方です。人生を通じての資産運用で大切なことはムダを省くことです。投資信託は資産運用になくはならない投資対象ですが関係者が多いのでコストが高くなりがちです。株式などの無駄な売買は手数料で大切な資産が流出します。

<積立て>

二宮尊徳に「積小為大」という言葉があります、「少額を積み立てて大きな財産をなす」というのはまさに積立投資そのものです。コストの低いグローバルな株式インデックス・ファンドを対象に一定の金額を価格が値上がりしているときも値下がりしているときもひたすら続ける。毎月、一定額を自動的に投資していれば、価格が安いときは多めの口数を、高いときは少な目に買うことになります。これが成功の秘訣です。

<将来の自分は今の自分が支える>

二宮尊徳の言葉の中で私が特に好きな言葉は「勤儉譲」です。「勤」は勤勉の勤。一生懸命に働くということです。プロとして本当に世の中のためになる仕事をし、みんなから感謝され感謝のしるしの報酬を得る。そして最大限の節約をする、これが「儉」です。そうすると自然に資産が貯まります。それを「譲」、譲るのです。尊徳はこの「譲」を「自譲」と「他譲」に分けています。つまり、将来の自分に譲る、そして、世の中のため、困っている人のために譲るのです。今日的には投資と寄付です。これはマックス・ヴェーバーの「天職に励め、できる限り節約せよ、できる限り他に与えよ、そして天国に宝を積み」という考え方と似ています。それに自譲という概念まで入れているのです。ヴェーバーよりも100年近く前に生きた尊徳がこれを述べているのは驚くべきことです。